アメリカ軍の残虐行爲（付錄）

国際婦人調査團報告

国際婦人調査團による朝鮮にいるアメリカ軍と
李承晩軍の残虐行爲調査報告書

国際民主婦人連盟の招きをうけて、さまざまな婦人団体—国際民主婦人連盟やその他の婦人団体—から派遣された代表として、わたしたちは朝鮮にいるアメリカ軍と李承晩軍のやつた残虐行為を調べるために、国際婦人調査団に参加しました。わたしたちはヨーロッパ、アメリカ、アジアそれにアフリカの十七カ国を代表しています。

調査団のメンバーは、次のような人たちです。

団長**ノラ・K・ロッド**（カナダ）、副団長**リウ・チンヤン**（中国）、同**イダ・バツハマン**（デンマーク）、書記**ミルセ・スヴアトソヴア**（チエコスロヴアキア）、副書記**トレース・ソエニト・ヘイリゲルス**（オランダ）、**モニカ・フエルトン**博士（イギリス）、**マリア・オヴシヤンニコワ**（ソ連）**バイ・ラン**（中国）、**リ・ケン**（中国）、**ジレツト・ジーグレル**（フランス）、**エリザベタ・ガロ**（イタリア）、**エヴア・プリースター**（オーストリア）、**ヒルデ・カーン**（ドイツ民主共和国）、**リリー・ヴエヒター**

（西ドイツ）、**ジエルメ・アンネヴアル**博士（ベルギー）、**リ・チケ**（ヴイエトナム）、**カンデラリア・ロドリゲス**法学博士（キューバ）、**レオノル・アギアル・ヴアスケス**法学博士（アルゼンチン）、**フアトマ・ベン・スリマン**（チュニジア）、**アバシア・フオデイル**（アルジエニア）、オブザーバーとして**カーテ・フレロン・ヤコブゼン**（デンマーク）。

各国各民族の、またさまざまの宗教や政治的見解をもつているわたしたち婦人――その中には、種々な政党員もいるし、政党に関係のない人もいる――は、目のまえに一つの共通の仕事をもつたのです。つまり、この調査団にわたしたちを派遣した婦人たちや、全世界の平和を愛する人たちにたいして、わたしたちが見たままの事実を、良心的に正しく伝えるという仕事です。

ここに述べてあるすべての事実や、この報告に記録している数字、その他の資料は、調査団のメンバーが自分で書きしるしたものです。これらの事実は、メンバーたちが自分自身の目でみた明らかな事実であり、朝鮮にいる目撃者や官吏が話したことそのままのものです。

この報告書は、一九五一年五月十六日から二十七日までのあいだに、朝鮮の平壌付近でつくり、また署名したものです。

第一章

調査団は、朝鮮と中国の国境の一都市シニジュ（新義洲）をおとずれた。この町は、ほとんど完全に破壊されていた。残つた建物はひどくこわれていた。町はいく度も爆撃されたが、被害のほとんど全部は、一九五〇年十一月八日の夜三回にわたる空襲と、十一月十日、十一日の空襲によるものであつた。調査団がシニジュ（新義洲）をおとずれた日には、三回警報がでた。

シニジュ（新義洲）市人民委員会代表の公式発表によれば、この町は一九五〇年七月には一万四千戸に十二万六千人の住民が住んで、働いていた。調査団は、この町にはすこしでも軍需生産に役だつような工業はなかつたということをきかされた。町には軽工業があつただけである。つまり、大豆、豆腐（大豆製品）の加工、靴、マッチ、塩、箸の製造である。一九五〇年十一月八日この町は、朝鮮にいるいわゆる国連軍に属する空軍百機の爆撃をうけた。この時、総計三千十七あつた国の家と市の建物のうち二千百が破壊され、住宅一万一千余戸のうち六千八百戸がこわされた。五千人あまりの住民が殺され、そのうちほぼ四千人は婦人と子供であつた。十七の小学校のうち十六は破壊され町の十

九の中学校のうち十二が焼夷弾で焼かれた。各派十七の教会のうち残つたのはたつた二つだけであつた。二つの市立病院は、国際慣習の規定通りそれぞれ屋根に大きな赤十字をつけていたのに、焼夷弾で焼かれた。調査団のメンバーは、残つた屋根にこれらの赤十字の跡があるのを見うけた。ある病院では、二十六人の患者が焼夷弾の焰で焼け死んだ。調査団は、大きなプロテスタント教会が直撃弾をうけた時、二百五十人の人たちが死んだということをきいた。調査団が耳にした他のエピソードの中には、市営食堂の爆撃後避難しようとしている間に、三十人の母親と子供が殺されたという話があつた。人口の密集している市場地区では二千五百人の人々が死傷した。十一月八日のシニジュ（新義州）市の負傷者の総数は三千百五十五人であつた。調査団のメンバーは、ガラクタの中から堀り出された爆弾の破片をしらべ、次の記号を書きとめた。Amm. Lot RN—14—29 shell M J For M 2 a MF MFL 1 Lot—GL—2—116 1944 MJECA 2 ACT464

住民の大多数は、破壊をまぬがれた材木と土で壕をつくり、そのなかに住んでいる。これらの壕のうちにあるものは、こわれた建物からとつてきた瓦や材木の屋根をもつている。他の人たちは爆撃後残された穴倉に住んでおり、なお他の人たちは、こわれた建物の骨の中に張つたテントや、しつくいもぬつてない煉瓦や瓦片でつくつた小屋に住んでいる。ある団員たちはこれらの小屋の一つを訪れた。

そこにはクオン・ムンスン（権文秀）一家が住んでいた。家族は父親と母親と三人の幼児であつた。小屋は二つに区切られていて、一つは居間兼寝室、他の一つは台所であつた。居間の方は三メートルに二メートル、台所は一五メートルに三メートルの広さである。この一家はひろい家と毛布を一枚持つているというので、付近の人たちから幸運だと思われていた。

三回にわたる大空襲が、おもに多数の焼夷弾によつてやられたことは明らかであつた。だが、団員たちは、なぜ被害がこのように広くおよんだのか、はじめはわからなかつた。たまたま、わたしたちと話しあうために集つた市の、吏員や公衆の人たちから話をきいて、やつとその理由がわかつた。わたしたちと話しあつた人たちは、すべて次のようにいつていた。焼夷弾の最初の波が落された時、火を消そうとして街路に飛び出したものは、低く飛んできた飛行機に故意に銃撃された。市が大規模に焼失したのは、火を消そうとしていた市民を、故意に銃撃したことに原因があつた。

市の一婦人チャン・ユンチャ（張潤子）は、かの女の父親と夫は、焼夷弾で燃え上つた自分たちの家の火を消すため水を取つてこようとしている時、低空飛行の銃撃で殺されたといつた。他の婦人キム・インタン（金仁丹）は十一月八日の空襲で三人の孫と娘をなくしたと語つた。子供たちは、かれらの燃えている家から走つてでる時、低空飛行の銃撃によつて殺されたのである。娘は自分の末つ子

を火の中から引きづり出したところを射たれた。キム・ホンエン（金洪潤）は、かれの妻は焼夷弾で燃え上つた家から走り出たところを、機銃掃射で殺されたと話した。

シニジュ（新義州）から平壌へゆく途中で、調査団は、通過した町や村のすべてが、完全にあるいはほとんど完全に破壊されているのを見た。それらの町はナムシ（南市）、チエンチュ（定州）、アンジュ（安州）、スクチエン（順川）それにスンアン（順安）である。大部分の村は廃墟同然であつた。

以上には一九五一年五月十八日調査団の全員が署名した。

第　二　章

調査団は、朝鮮人民共和国の臨時首都平壌をおとずれた。

戦前、平壌は四十万の人口をもつていた。煉瓦造りや鉄筋コンクリートの、大きな近代建築物がたくさんあつた。またたくさんの近代的なアパートがあつたが、それらはかつては、近代式な煖房設備や衛生設備を完全にそなえていたことが、その残骸からわかつた。

市には、また非常に多くの工場があつた。主な工業は織物、靴、種々の食料品、煙草、酒、ビール、それに肥料の製造であつた。

平壌にあつた主な建物は、一つのオペラ・ハウス、九つの劇場、二十の映画館、一九四五年以後に建造され、設備された一つの近代的な綜合大学、七十三の小学校、二十の中学校、六つの専門学校、四つの工業大学であつた。また二十の夜間成人学校と、戦争勃発当時ほとんど完成されていた一つの大きな工芸講習所もあつた。

市内は、いままつたくの廃墟である。市内の旧地域の大部分では、たおれた家の壁だけが、灰とガラクタの山の中に、あちこちそそりたつている。近代建築物のあるものは、屋根も内壁もなく、ただ骨組だけが立つている。他のものは、かつてそこに建物が立つていたことを示す二、三の壁のかけらが残つているだけである。いままで述べた建物のほかに、多くの教会やすべての市立病院がみんな破壊された。団員たちは、市内でいちばん大きな小学校の廃墟を調査した。外側の壁の一つには「第七十七野砲隊用」とチョークで書いてあつた。調査団のえた証拠によれば、市の八〇%はアメリカ軍が市内から退却する時に破壊した。（アメリカ軍が戦わないで退却し、市を故意に、計画的に破壊したことは、注目すべき大切な事柄である）。破壊は、今日事実上一〇〇%にたつしている。それでも爆

撃はやはりつづいている。調査団が市内でまる一日をすごすうちに、五回の警報が鳴り、その同じ日に約一週間まえに落された時限爆弾が三つ、調査団のメンバーと地方組織の代表者が話し合つていた場所のすぐ近くで爆発した。

団員たちは、市がどんなふうなやり方で破壊されたかを知ることができた。市は戦争がはじまつたときから、ずつと爆撃され通しであるということであつた。いちばんひどい空襲は、一九五一年一月三日におこなわれた。この時、市はアメリカ軍のB—29八十機に爆撃された。B—29は十五分か二十分おきに編隊をくんでやつてきた。爆撃は三日の夕刻からはじまり、翌日の午後まで続いた。爆撃は焼夷弾ではじまつた。次に石油をつめた気球のような爆弾が、つづけざまに落された。それから強力爆弾の波がつづき、また焼夷弾が一しきりやつてきた後、時限爆弾がまき散らされたのである。焼夷弾による火災と時限爆弾の爆発のために、住民はすこしも救出作業をすることができなかつた。したがつて、生き埋めにされた無数の人々は、ついに窒息して死んでしまつた。たくさんの死体は、いまなお掘り出されていない。

一月三日と四日に破壊された建物のなかには、市内の病院の大部分が含まれていた。これらの病院は平らな屋根をもち、六千メートルないし八千メートルの高度からわかるように、どれにも大きな赤

十字のしるしがついていた。これらの病院は、少くとも一個づつの直撃弾をうけた。調査団のメンバーは地方病院の残骸を見学し、三つの大きな爆弾穴をしらべたが、そのうちの二つは深さが約四メートル、一つは七メートルもあつた。市立中央病院は三十メートルの高度まで降下してきた急降下爆撃機に破壊されたといわれている。

市の建物ぜんぶが爆撃だけで破壊されたものでないことは、先に述べた通りである。事実、多くのアメリカ軍が退却する時、爆薬で破壊したか、放火したのである。こうして破壊された建物のうちには、キム・イルセン（金日成）大学、男子中学校、オペラ・ハウス、市の諸施設、多くの食糧工場とすべての政府施設がある。アメリカ軍がこの市から退却する時、かれらは故意に市電の全部に火をつけ、いくつかの橋や水道を爆破したことについても、調査団は報告をうけた。

市を出外れたところで、調査団は、河を見はらす岡の上に立つ有名な仏寺イエンムエン・サ（延命寺）の残骸を見た。二千年の間朝鮮人民の崇敬の的であつたこの寺も、爆撃でこわされたのである。広々とした田圃の中にある寺の位置から判断して、爆撃機がなにか他の目標をねらつていたと信ずることはできない。目撃者の証言によると、アメリカ軍が一九五〇年十二月平壌を退却した時、寺は無事であつた。しかし、一九五一年一月三日にアメリカ機が多数の強力爆弾、焼夷弾、それに焼夷薬の

つまつた容器をこの寺にあびせたのである。

調査団のメンバーはまた、市の有名な博物館をおとずれた。それは破壊はまぬかれたが、二千余年を経ているという有名な二つの仏像もまじえて、その宝物を盗まれていた。有名な考古学者リー・イエセン（李如星）氏は、掠奪された品物の長いリストを、団員たちに見せた。かれはまた、アメリカ軍が博物館に残したものは、北鮮の三十の古墳で発見された貴重な壁画の手摺りの模造品だけだつたと説明した。これらの古墳のうち六つは、朝鮮婦人を拷問するためにつかわれ、手榴弾で古墳が爆破されたときに、壁画はこわれた。

調査団がくりかえしきかされたのは、空から市民にむけて機銃掃射をやつた例であつた。（調査団のメンバー自身も、防備のない田舎のまつ只中で、低空をとぶ飛行機から機銃掃射をうけて、壕に避難せねばならないことがあつた。これは、農民が働いているだだつぴろい野良に機銃火をふきかけたわけであるが、前線から数百キロメートル、また市街や軍事目標物からはるかに遠くはなれたところでおこつたことである。）平壌のガラクタの山の中をあるきながら、団員たちは建物の残骸の中に散らばつている飛行機用機銃の使用ずみ薬莢を多数見つけた。団員たちはまた米軍が新兵器をつかつた証拠を発見した。その一つは、地上に達した時、あるいは建物に接触した時、爆発しないで開く爆弾

である。そして、それがひらくと煉瓦や木材やあらゆるものにくつつく多量の物質が発射され、その瞬間か、少し後になつて、日光をうけてぱつと燃え上り、建物全体を火の海にしてしまうのである。このガソリン気球の使用については、もはや外でも伝えられている。団員たちは、この種の飛道具の破片を検査した。それは長さが約三メートル、巾が一メートルで、先がだんだん細くなつており、いちばん細いところが五〇センチ、いちばん広いところが一メートルであつた。調べた結果、気球のマークは一部分だけ判読された。その読めるマークは——PA RA contract HOAF 33／5077—40—Oa N4 888となつていた。調査団はつぎのことを知つた。つまり、平壌その他の都市で、この型の爆弾がつかわれたのとは別に、昨年の収穫期に畠に実つた穀物に損害をあたえるために、この同じ兵器がつかわれ、この方法で食糧供給に大きな被害が加えられたということである。もはや他でもつたえられている時限爆弾も新兵器の一種であり、雷管は見当らず取りはずされていた。

団員たちはまた、「強力爆弾ＧＢ5143」としるされた爆弾ケースを発見した。この爆弾は、モラン・ボン（牡丹峰）にある殿堂を破壊した爆弾の一つであつた。平壌の生残りの住民たちは、原始的ではあるがなんとか工夫した壕や、自分自身で工夫をこらして穴を改造した避難所や、または爆撃された建物の残つた壁の内側に住んでいる。それぞれの目的にしたがつて四つのグループにわかれた団員た

ちは、四時間近くの間、市のさまざまなところを訪れたが、その間誰れ一人として、四方の壁と屋根のある家を一軒も見なかつた。そして団員たちは、ガラクタの堆積の中に住んでいる多数の生き残りの家族に出あつた。たとえば、カン・ボクセン（姜福善）一家は三才と八カ月の子供をまじえた五人家族で、平壌民主婦人同盟のこわれた本部の下の壕に住んでいた。この壕はほぼ一メートルと二メートルの広さで、家族たちは唯一の住家であるこの避難所に行くために、三メートルも深い狭い穴を這つてゆかねばならなかつた。土の壁が低すぎて、大人は真直ぐに立てないのである。

調査団は、この避難所が例外ではなく、むしろ代表的なものであり、同じような状態の家族の例は、もつと多くあげることが出来るとの結論にたつた。この壕に住むカン・ボクセン（姜福善）の娘が調査団に話したところによると、アメリカ軍はオペラ・ハウスやその附近の住家を軍用娼家にした。この娼家に、かれらは街頭でつかまえた婦人や少女を強制的につれてきた。そうなる運命をおそれたので、かの女は四十日間も壕から出なかつた。かの女の友人の夫リー・サンセン（李相先）は、妻をかくしたという理由でアメリカ軍にぶんなぐられたという。平壌の一住民クオン・ソンドン（権善敦）という市の他の地区からきた労働者は、この話はほんとだと保証した。

その他多くの平壌の居住者が、アメリカ軍のやつた残虐行為を話した。三十七才で、四人の子供を

爆弾でなくした母親キム・ソンオク（金性玉）は次のように話した。かの女は一九五〇年七月三日に家を爆破されたのち、ソンサン・リ（善山里）村に引上げた。そこで、かの女は、三十七人の人がアメリカ軍に殺されたのを見た。その中には地方婦人組織の書記もいた。アメリカ軍は、その婦人を裸にして街を引きまわし、そのあとで赤く焼けた鉄棒を膣の中にさしこんで殺した。かの女の幼児は生き埋めにされた。

以上には、一九五一年五月二十一日調査団の全員が署名した。

第三章

調査団のメンバーは、ワンヘイ（黄海）道にゆき、アナク（安岳）、シンチエン（信川）の町をおとずれた。この訪問に参加したのはエヴァ・プリースター（オーストリア）、リ・ケン（中国）、カンデラリア・ロドリゲス（キューバ）、ノラ、K・ロッド（カナダ）、マリア・オヴシヤンニコワ（ソ連）、モニカ・フエルトン（イギリス）であつた。

調査団は、ワンハイ（黄海）道の全地域で十二万人が占領軍に殺され、それに加えて多くの人々が空襲で殺されたということをはつきりとたしかめた。アナク（安岳）市では、一万九千九十二人がアメリカ、イギリス、李承晩軍に殺されたということである。アナク（安岳）市では、調査団のメンバーは、戦前は農民銀行の倉庫であつたが、アメリカ軍が牢獄に変えた建物をおとずれた。それは、それぞれ長さ四メートル、巾三メートルの五つの檻房に区切られていた。証人たちは、これらの檻房はいつぱいになつて、すわることができなかつたといつた。

スンサン・リ（崇山里）街一九四番地の農婦ハン・ナクソン（韓洛善）は、かの女の夫キム・ボククアン（金奉寛）と義弟キム・ボククオン（金奉均）が一九五〇年十一月十日につかまり、この牢獄に投げこまれたと調査団に話した。この逮捕は二人のアメリカ兵と四人の李承晩軍の兵隊によつて行われた。かの女は逃げだしてかくれた。かの女は、また次のように話した。かの女の夫や義弟その他の囚人は、みんな農民か労働者であり、どこかの役人であつたり、労働党員であるものは一人もいなかつた。多くの子供たち――その中には二才の子供もいた――が、母親といつしよにこの監獄に入れられた。囚人たちは、十五日間食物なしで監禁され、鉄棒でなぐられた。これらの殴打はアメリカ軍将校の命令で、李承晩軍の兵隊によつて行われた。一九五一年十一月二十五日、婦人や子供をまじえ

た囚人たちは、丘につれだされ、堀のなかに生き埋めにされた。

もう一人の証人キム・サンイエン（金相延）——かれはセサン・リ（世山里）街一七二番地に住んでいる——という年配の男は、次のように話した。かれの十二人の家族は、息子、息子の妻、孫二人をまじえて全部つかまつた。最初は、かれ自身何が起つたのかわからなかつた。後になつてかれらは丘につれて行かれ、殺されたことを知つた。市が解放されてから、かれは、かれらの死体をさがしに行き、息子と息子の妻がいつしよに縄でしばられている遺骸を見つけた。どの死体にも傷がないので、キム・サンイエン（金相延）は、かれらが生き埋めにされたのだと判断した。かれの息子は国営工場で働き、突撃労働者であつたというので逮捕された。かれ自身も、十月十八日につかまつたが、同二十九日に釈放された。最後に、かれは団員たちに、かれ自身常日頃信仰ぶかい人間であつたので、キリスト教徒であるアメリカ人の善行を期待しており、このような残虐行為をアメリカ人がやるなどとは、とても想像できなかつたと語つた。

調査団のメンバーは、それからもう一つの監獄をおとずれた。ここでも、団員たちは、囚人がすわつたり、横になつたりする余地がなかつたということをきかされた。囚人を殴るためにつかつた道具を見せられたが、それらはアメリカ陸軍の野球用バットと同じ物であつた（このバットは証拠品とし

てもつて帰つた）。監房の外側の木造の廊下には、血痕がはつきりと見られた。

サンナイ・リ（上内里）街一八七番地の一婦人ショイ・ウムボク（崔応福）は、かの女の夫と息子がこの監獄に監禁され、あとで殺されたといつた。息子の妻はあんまりひどく打たれたので、いまだに床についている。九才の少年パク・チャンオイ（朴燦以）は、父親のパク・ピアンスウ（朴判順）（四十六才）も殺されたといつた。誰が父親を殺したのかとたずねると、「アメリカ人」と答えた。少年とかれの母もつかまえられ、この監獄に監禁された。かれらも殺されぞうになつたが、朝鮮人民軍に解放されたといつた。その母親は、赤く焼けた縫針を指の爪にさしこまれて、拷問されたという。団員たちは、その醜い傷あとを見た。またかの女は、かの女が拷問につれてゆかれた時、外庭の穴に生きたまま投げ込まれる人たちを見たといつた。

調査団員たちは、その穴を検査した。それは使えない井戸で、高さ約六十センチのコンクリートの壁でかこまれ、直径はおよそ一メートルであつた。深さは七、八メートルあり、朝の強い光で人間の死体が、井戸の底にあるのを見ることができた。光るボタンのついた黒い上衣を着た子供の死体が、表面の一番近いところにあつた。

それから団員たちは、市から二キロばかり離れたところに案内された。そこの広々とした丘のそば

に、多くの市民が埋められていた。あるものは小さなグループで、他のものは大勢いつしよに墓に入つていた。遺骸を調査するために、墓は掘りおこしてあつた。一つの墓は、子供たちをうめたもので、身元のわかつたものは、解放されたとき、別々に埋葬した。残りの死体は傷ついていて、見わけがつかなかつた。死体から離れたところに、子供の靴、婦人の髪の毛、本、ちよつとした手廻り品、それに人々が縛り合わされていたロープがあつた。もう一つの大きな墓は、大人の死体で一杯であつた。証人ファン・シンヤ(黄信裕)は、かの女の母は生き埋めにされたが、やつとはい出し、その後またつかまり、埋められたといつた。同じ墓に四百五十人の人が埋められたといわれる。このような墓が、この丘のまわりに二十カ所もあり、また約十二の丘が、こんなふうに使われているということである。

次に団員たちは、地方からやつてきたたくさんの婦人たちに会つた。アナク(安岳)市から三十二キロのオングン・リ(温宮里)からきたキム・センアイ(金聖愛)という十二才の少女は、アメリカ軍が村にやつてきた時かの女は四年生で、両親といつしよに監獄に入れられたといつた。十二日たつて父親ははりつけにされ、河に投げ込まれた。かの女の母親は労働党員であつた。そのため、母親は首を切られた。またかの女の四才の妹は生き埋めにされた。現在かの女は孤児学校にいるが、調査団がこの地方にきたと先生からきいたので、証拠を出すために、先生の許しをうけてやつてきたのだと

いつた。

キム・センアイ（金聖愛）とおなじ学校にいるもう一人の十二才の少女シン・スンヅァ（申順子）は、アメリカ軍が近づいた時、母や姉といつしよに家から逃げだしたが、つかまつたといつた。訊問に答えなかつたのでなぐられ、母と姉は射殺された。かの女は逃げたが、アメリカ軍にまたつかまり、投獄され、なぐられた。団員たちは、かの女の頭にまだ深い傷あとがのこつているのを見た。

ウォンオン・リ（完元里）からきた十六才の少女オク・ブンツェン（玉粉全）は、両親がつかまり、それから釈放され、またつかまつたといつた。かれらは首を切られて河に投げ込まれた。そのことは、かの女をまじえた村全体の人たちが目撃した。その後、かの女はつかまり、立つているだけの狭い監獄に入れられた。そばにいた婦人の子供が泣き出した時、アメリカ兵はその子供を銃剣でつきさした。

アナク（安岳）から八キロのウ・セリ（禹世里）からきたシム・トンビン（沈同敏）という婦人は、夫、義父、義母、義妹がアメリカ軍に殺されたといつた。かれらはみな射たれたが、まだ生きていたので、義父以外は銃剣でつき殺された。義父は生き埋めにされた。アナク（安岳市）ヨナム・リ（麗南里）街四番地にいる四十九才の婦人オク・エウポン（玉礼粉）は、二十五才になる息子がアメリカ軍につかまり、鉄棒でなぐられ、ひどく頭をわられたが、生きていたので、生き埋めにされたといつ

た。かれの嫁は袋に入れてなぐられ、そのままほうり出された。その後、かの女が袋を見つけ出し嫁を救つたが、いまだに床についていて、動くことができない。アナク（安岳）市から二十キロのチエド・リ（崔度里）村からきた若い婦人ツエン・ファウク（千花玉）は、アメリカ軍につかまり、十九人の農民といつしよに射殺されるために連れ出された。かの女は肩を射たれ、ほかの人といつしよに河に投げ込まれた。かの女と四十才の婦人リー・ヒツイン（李喜全）は縄をほどき、約六キロを泳いだ、リイ・ヒツイン（李喜全）は、傷のために死んだが、ツエン・ファウク（千花玉）は、ほら穴にたどりつき、朝鮮人民軍がやつてくるまで、三カ月半そこにかくれていた。かの女は団員たちに左の肩の三つの弾のあとをみせた。かの女は、またかの女の村で百人以上の人たちが殺されたといつた。

旅行中、調査団の車は、途中の村々の住民たちに、しばしば呼びとめられた。住民たちは、アメリカ軍からうけた多くの苦痛の例をくわしく話した。

シンチエン（信川）へ行く途中で、団員たちは足を泥だらけにして、重い道具をはこんでいる農民たちに呼びとめられた。かれらの話では、この地方の河が増水したために、いく月も前に投げ込まれた死体が、水面に浮んできたということであつた。かれらは、その夜同じ村に住んでいた人の死体を引き上げているのであつた。

調査団は、シンチエン（信川）市で数時間をすごした。この町では、二万三千二百五十九人が殺されたといわれる。団員たちは、もと学校で、アメリカ軍が地方司令部につかつていた建物をみた。この建物の外側には、二つの自然のほら穴があつた。第一のほら穴には三十八人の婦人と子供が閉じ込められ銃殺されたといわれる。第二のほら穴には百四人が閉じこめられ、頭の上からガソリンをふりかけ火をつけられた。しかし、全員が焼け死んだわけではなかつた。焰のとどかなかつた人たちは窒息して死んだ。第一のほら穴の壁には血のあとがあり、第二のほら穴の内側には焼けあとがまだはつきりとみとめられた。前に書いた建物の前方にある一つの壕は、その地方の人民を訊問し、拷問するために使われたという。ここでも、壁の上に血のあとを、はつきりとみとめることができた。

つぎに団員は、アメリカ軍が町を占領した時、一部出来上つていただけでアメリカ軍の地方行政府と警察に使われた建物にいつた。この建物の後がわには、朝鮮人民が、空襲避難所にするために掘りひろげた、ちよつとした自然のほら穴のようなものがあつた。建物の中に閉じこめられていた四百七十九人の人々は、アメリカ軍が町を引上げる時、この穴の一劃に入れられ、ガソリンをかけて、焼き殺されたといわれている。穴のなかの他の大きな区劃では、千人あまりの人が機関銃で殺された。コホム・リ（古換里）街二四八番地のハン・ヤングアン（韓良煥）という目撃者は、かれは製粉労働者

で、アメリカ軍がやつてきた時、町を逃げだして、パルチザンに加わり、解放後に帰つてきて、この穴の小さいほうの区劃から死体を掘り出すのを手伝つたところ、死体は裸で焼けこげており、どれにも射たれたあとはなかつたといつた。

団員たちは、穴のなかの壁に血のあとや焼けあとをみたし、また骨のかけらも見た。

穴の外で、団員たちは、身内を殺された多くの地方住民たちに会つた。コホム・リ（古換里）街二四七番地のチャイ・チュンオク（崔俊玉）という六十五才の婦人は、大きなハサミのような道具をもつてきた。かの女の話によると、それは囚人の足をはさんだり、そのほかそれに似たような拷問につかつたものであつた。またかの女の八人の息子や娘のうち七人は、大きな穴のなかで射たれた人たちにまじつていた。かの女は「アメリカ人は気の狂つたけだものです。かれらはやつてきて、ここにいるものをみな殺しにしました」といつた。

もう一人の婦人サドン・リ（砂洞里）街一九七番地のパク・ヨクス（朴如淑）は、夫と息子と六人の孫が殺されたといつた。息子は農民であつた。かの女は「わたしたちは、アメリカ人はクリスチャンで、紳士だと思つていました。かれらがこんな残忍なことをして人を殺すとは思いませんでした」といつた。

サンドン（上洞）街のペン・スンス（卞性朱）という十三才の少年は、十三人のかれの家族のうちで生きのこつたのは、かれ自身と母親だけであるといつた。ほかのものはなぐられたうえで、ほら穴のなかで焼き殺された。

パク・ス（朴寿）という婦人は、家族をみんななくしてしまつたが、「アメリカ人はキリストを信じていながら、どうして人が殺せるのでしようか」といつた。アメリカ人がやつてくるまで、わたしはクリスチャンであり、きちんと教会にかよつていたが、いまでは、もう何にも信じることができなくなつた、とかの女は言葉をつけたした。

上にのべたはじめの訪問と二番目の訪問のどちらの場所でも、調査団のメンバーは、ゆくさきざきで、人間の肉のくさつてゆく強い悪臭に気がついた。

それから、調査団のメンバーは、町のすぐはずれの山のそばにつれてゆかれた。ここで、縦十五メートル、横九メートルの煉瓦づくりで、セメントをぬつた平屋根の倉庫を見せられた。窓はたかいところについていて、重々しく門がかけてあつた。ここでは、三百人の婦人が、生きながらやかれたという話しをきいた。その婦人たちのつれていた子供は、餓死させられた。ソンワ（松花）街一一番地の、ヤン・エンデク（梁英徳）という三十八才の証人は、五人の子供があつたが、みんな殺されてし

まつた、と話した。かの女の夫も殺された。かの女自身も二才の子供といつしよにこの倉庫の中にとじこめられた。子供はアメリカ兵にふみつぶされて、はらわたがでてしまつた。かの女自身は二人のアメリカ兵につれだされて、両人から暴行をうけた。それからかれらに拷問されて、外へ放りだされたので、やつと逃げだした。

三十六才ぐらいのサン・アイス（孫愛秀）という婦人は、その家族十五人がぜんぶアメリカ兵にころされたと話した。かの女の三人の子供は、この倉庫のなかで凍死した。

リン・ナンヤ（林那女）という十九才の少女は、アメリカ兵が両親と兄弟二人を射殺したといつた。

二十一才のソン・スクマ（宋淑梅）は、十人家族のうち自分一人だけが生き残つたと話した。かの女の夫、赤ん坊、両親、それに兄弟たちはみんなアメリカ兵にころされた。かの女自身は、ハイジユ（海州）で監獄にぶちこまれ、着物をぜんぶはぎとられて、まつぱだかにされた。いつしよにつれていた子供は餓死した。

サンズエン・リ（山田里）街二番地にすむ三十五才のパク・ミズア（朴美子）というもう一人の婦人は、二十二人の家族のうち生き残つたのはかの女だけだといつた。かの女はわれわれに質問した。

「わたしたちの仇討ちに、あなたがたはどういう手助けをしてくれますか？　仇をうたねば生きてお

れません。」

この倉庫から六十メートルのぼつた山腹で、調査団のメンバーは二つの墓をみたが、それはその中をしらべるためにほりかえしてあつた。片一方の方には七十人の子供の死体があり、他の方にはおよそ二百人の婦人の死体があつた。死体はみんなひどく黒こげになつていた。また、その少し上のところには、小さな監房があつたが調査団のきいた話しでは、それは子供専用のものであつたということであつた。その監房はこわされていた。土地の人たちの話によると、この辺が解放されてからのちというもの、倉庫やその付近の墓の一帯はたびたび爆撃をうけたが、それはアメリカ軍が自分のおかした罪の証拠を湮滅するためだと考えられるということであつた。墓までゆくときに、調査団のメンバーは、いくつかの爆弾の大穴をまわつてゆかねばならなかつた。

サンズエン（山田）街八番地にすむ四十二才のソン・チュンオク（孫準玉）は、かの女の家族はみんな殺されたといつた。小さい子供は、斧と小刀でころされた。かの女はいつた。「わたしは前線にいつて、朝鮮ぜんたいが解放されるまでは、何でもします。」そして、つけくわえた。「こんなことをしたのはアメリカ兵だけではありませんでした。イギリス兵だつてやりました。」

あとで、五十代の婦人の一団が、遠いものは四十キロもはなれたシンチエン（信川）あたりから、

調査団のメンバーに会うためにやつてきた。これらの婦人たちは、自分自身の経験を話そうとめいめいが希望していたが、時間がたりなかつたので、その中のほんの一部の人の話しかきけなかつた。

キムズエ・リ（金崎里）からきた六十五才の婦人キム・イエン（金蓮）は、かの女の娘のペン・ドンナン（辺貞礼）（三十四才）は、活動的な農民だというのでつかまつた、という話しをした。アメリカ軍の将校の一人は、お前のためにたまなどつかうのはむだだ、とその娘にいつた。そして、かの女のおぶつていた二つの子供を銃剣でつきさし、その上、手足をしばられていたかの女を串ざしにした。「金日成と共和国万才！」とかの女がさけんだときに、その舌を切りとつて、生けうめにしてしまつた。キム・イエンの話によると、彼女がその娘の最後のくわしい話をきいたのは、李承晩軍の一兵士からであるが、この兵士はアメリカ軍将校の命令で、この野獣行為をやつたことを自慢にしていたということであつた。その上かの女の養子、その母、その兄弟、それに十五と十七のかの女自身の二人の孫も射殺されてしまつたと、キム・イエンは話した。

クオンチユー（孔朱）の村からきた四十一才の婦人ユ・トンズエ（柳東子）は、この地方で罪もない人が三万五千人も殺されたと、調査団のメンバーに話した。かの女の村では、百七十五人の人がころされた。かの女の家族も十八人殺されたが、その中にはかの女の夫や生後五カ月の末つ子もはいつ

ていた。かの女自身もつかまつたが、あとで釈放された。かの女の村には、アメリカ兵もイギリス兵もいたが、両方とも野獣のような行動をしていたと、かの女はいつた。かの女は、アメリカとイギリスの兵隊が罪もない人々を、どんなふうに川のなかに投げこんだかを、自分自身の目で見たと話した。その兵隊たちの国籍がどうしてわかつたかとたずねたところ、イギリスとアメリカの軍服のちがいでわかつたと、かの女はこたえた。かの女はわれわれにききかえした、「イギリス人というものは、慈悲を知らないのですか。あの人たちは小さい子供を殺すのを信仰にしているのですか。」かの女の話によるとアメリカ軍は撤退するときに、かの女の村の人たちにいつた、「いつしよに南についてこい。北鮮には原子爆弾をおとすことになつている。それですべては破滅するのだ。」そこで村人たちが村をでて、南方に移動しはじめたとき、飛行機があらわれて機銃掃射をくわえた。

サンゲン（傘玄）からやつてきたニ・ユニエ（李蓮愛）は、かの女の娘と婿が殺されたといつた。娘は学校の先生であつた。二人は射殺されたのではなく、杖で打ちころされたのであると、この証人はいつた。

サオク・リ（砂玉里）からきた二十二才のパク・オンイン（朴恩仁）は、かの女の夫は、みんな百姓だつた兄弟三人といつしよにつかまり、みんな殺されてしまつたといつた。かの女自身はキム・エ

ンスン（金潤順）という十八才の少女が暴行をうけて、それから殺されたのを自分自身の目でみたといつた。それをしたのはアメリカとイギリスの兵隊であつたと、かの女はいつた。アメリカ兵はいく人かの人の鼻の穴に焼けた鉄をつつこんで、街にひきずつていつたと、かの女は話した。かの女は、それをやられた一人の百姓を知つていた。その人の名前はリー・サンスン（李相淳）といつた。かの女自身はたくみに逃げてゆき、山のなかにかくれた。あとでかの女は夫の死体を見つけた。夫の顔はたたきわられてひらいており、体は焼いてあつた。

チエクソ・リ（冊書里）街三番地からきた三十才のリー・デイイエ（李知恵）は、夫は庭師であつたといつた。アメリカ軍が夫をつかまえにやつてきたとき、アメリカ兵たちは北鮮人はみなごろしにするのだといつていたと、かの女は話した。かの女は、かの女のすんでいた街の家は百軒あつたが、そのうち九十家族が殺されたといつた。かの女自身は二人の子供といつしよにつかまつたが、監獄へうつされる途中で、逃げてきた。それで、平壌にいこうとしたところ、またつかまつた。アメリカ兵はかの女の銃殺を命じたが、李承晩兵の一人がかの女を逃がしてくれた。かの女は、北鮮人の捕虜が原つぱにつれだされて、石油をぶつかけられ、火炙りにされるのを見た。

サイサン・リ（写三里）のキム・スクセン（金淑先）は、かの女自身が婦人団体の活動家であつた

というので、その子供三人がつれてゆかれ、殺されたといつた。夫も殺された。二十才の娘キム・チュンズア（金春子）は、看護婦の勉強をしていたが、釘を耳につきさされ、背中に大鼓をゆわえつけられはだかで街をひきまわされた。そのあげく監獄にぶちこまれた。アメリカ兵はかの女に暴行をくわえようとしが、抵抗したので、銃でさしころされた。母親はかの女の死体をみつけたが、それはめちやくちやに傷がつき、二つに切りはなされていた。キム・スクセンの話によると、アメリカ軍は町にはいつてくると、娼家をこしらえた。若い少女や婦人をつかまえて、むりやりつれていつた。この証人の話によると、きれいな少女はアメリカ軍やイギリス軍の将校や兵隊にあてがわれ、その他のものは李承晩軍にあてがわれた。かの女は、この娼家にいたことのある三人の少女が、まだ生きているのを知つているといつた。その他のものは殺された。かの女の村には、百四十軒の家があつたが、全部で二百四十人の人が殺された。

サンチエン・リ（上倉里）の村からきた十四才のフアン・イクス（黄益水）は、十一人の家族のうち七人がアメリカ、イギリス、カナダ兵に殺されたと話した。かの女自身は、鉱夫の父が活動的労働者であるというので、つかまつた。そして、母親や二人の兄弟といつしよに監獄にいれられた。かの女自身はぶたれた。かの女は脛のうえの傷あとを調査団のメンバーに見せた。その家族は、それから、小

屋につれてゆかれ　石油をかけられた。しかし、小屋がもえるまえに、パルチザンがやつてきて、逃がしてくれた。パルチザンのなかには、かつてかの女の父親といつしよにいたけれども、たくみに逃げだしてきた男が一人いたのに、かの女は出あつた。この男は、かの女の父親は銃剣で五ヵ所ほどつきさされ、頭は打ちくだかれたと、かの女に話した。かの女の兄弟は、首に縄をまいて街をひきまわされ、ほかの五人の犠牲者といつしよに火炙りにされた。

黄海道を旅行中、調査団のメンバーは、ゆくさきざきで、こわれた都市と焼けた村々をみた。

以上には、黄海道をおとづれた調査団のメンバーの全員が署名した。一九五一年五月二十六日

第　四　章

平安南道南浦（日本帝国主義時代の鎮南浦）と、江西の調査報告。一九五一年五月二十二――二十三日。

参加者、ジレツト・ジーグレル（フランス）、フアトマ・ベン・スリマン（チュニジア）、アバシシア・フオデイル（アルジエリア）、リ・チケ（ヴイエトナム）、イダ・バツハマン（デンマーク）、カーテ・フレロン・ヤコブセン（デンマーク、オブザーヴアー）。

南浦は爆撃をうけるまえ、六万の人口をもつていた。いまではほぼその半分が町から出ていつた。われわれは、平安南道人民委員会委員長ソク・チヤンナム（石昌男）から、南浦にはぜんぜん軍需工業はなく、おもな工業はガラス、繊維、製陶、化学肥料であつたという報告をきいた。もちろん、南浦は黄海に面する海港ではあるが、商業上でも、軍事上でも港としては重要でない。というのは、海が浅いからである。

市には二万の建物があつた。工業大学、農業大学、劇場が一つづつあつたが、今ではみんなこわれてしまつた。市の十三の病院には、ぜんぶ赤十字の印をつけておいたが、焼夷弾でひどくこわされ、そのたつた一つに修繕がきくだけである。二十六の学校のうち、つかえるのはたつた二校しかのこらず、小つぽけな教会たつた一つが、やつと破壊をまぬかれた。

南浦のアメリカ軍占領は、一九五〇年十月二十二日から十二月五日までつづいた。その間に、たくさんの建物がやかれ、いつさいの食糧が破棄された。占領中、アメリカ軍は千百五十一人の人を野獣

的に殺した。そのうちの半分以上は、女子供であつた。

南浦はたえまなく爆撃されたが、いちばんひどい爆撃は、一九五一年五月六日のそれであつた。わたしたちは、市内を乗りまわし、また方々で車をとめて調査した。見わたすかぎり、ほとんどすべての家がかんぜんにこわされて、地面の爆弾穴、ガラクタの山、いく本かの煙突が、以前そこに家のあつたことをやつと示していた。残つた建物はひどい被害をうけていた。わたしたちが立ちどまつたところでは、どこでも、わたしたちのまわりに人人があつまつて、かれらの最近の悲劇、かれらの近親の死亡と、家の焼失のことをわたしたちに話し、アメリカ軍に拷問されて、うけた傷を見せてくれた。

市内のヨンドン・リ（永洞里）地区は、生存者の一人がいつたように、墓場にかわつてしまつた。それぞれの家族ごとに、三——四人、ときには十人の家族をうしなつた。一部が岡の上にあるこの地区では壁は一つものこつておらず、木々は黒焦げの幹がひかつているだけであつた。一つの爆弾穴のふちにたつて、リ・タンエアウ（李東華——四十二才）という男はいつた。「ここにわたしの家がありました。五月の爆撃のとき、家族のうち六人、家内に、二人の子供、三人の親類——をなくしました。わたしたち朝鮮人はわが国をまもります。どうか、国際婦人連盟は朝鮮のこの事業をまもつて下さい。」

キム・スヨン（金水永）というもう一人の男は、かれの家族十人をみんななくした。かれはいつた。

「朝鮮人はみんな一人のように団結しています。わたしは、わたしの感情をうまく表現できませんが、世界はきつとわかつてくれるでしょう。」

ほかの人たちは復讐をさけんでいた。

この同じ地区で、五月六日病院に焼夷弾が命中して、十六人の患者が殺された。

市内のほかの地区では、わたしたちは、ひどい火傷の治療をする臨時病院をおとずれたが、それは深い地下につくつてあつた。それは広さ一メートル半ばかりの低いむきだしの廊下で、岩をくりぬいて十七台の寝台をおくだけの場所であつた。

南浦の大きな市場は、四月廿一日のまつぴるま爆撃をうけた。四十八人ほど死んで、たくさんの食糧がだめになつた。今では市場はほとんど空つぽである。

北鮮最大の工場の一つである肥料工場は、一九五〇年八月三十一日六時間（午前九時から午後三時まで）の爆撃をうけた。九百人の労働者のうち三百人が死に、いくつかある大きな建物はひどくいたんで、大部分は修繕もきかなくなつた。

午後になつて、わたしたちはいく人かの証人にあつた。そのなかには二人の子供、キム・スンオク（金崇玉）、少女、十三才、キム・クオンホ（金共若）、少年、十一才がいたが、両人とも孤児院から

やつてきたのであつた。アメリカ軍は南浦にやつてくると、子供をむりやりキリスト教徒にしようとした。それをきかなかつたものは、食糧がもらえず、拷問をうけた。アメリカ軍は、退却するときに、中国義勇軍がやつてきたら子供をみんな殺してしまうという宣伝と、アメリカ軍は北鮮に原子爆弾をおとすという宣伝をひろめた。

グオン・タイソン(権泰成——四十四才)、はどの政党にもはいつていず、製粉工場をもつていて、労働者を十人やとつていた。アメリカ軍はやつてきたときその工場を没収し、逃げるときには何もかもぶちこわしてしまつた。それでも、グオン・タイソンはアメリカ軍の宣伝にまよわされて、アメリカ軍についていつた。かれは同郷人のいく人かといつしよに三十八度線ちかくの海州にむけて出発した。海州にはたくさんの避難民がよりあつまつていた。ところが、アメリカ軍は、その群集に機銃掃射をくわえて、数千の人を殺した。

プロテスタント牧師のホ・ヨンユク(許良郁——四十六才)は、南浦で四千五百人のクリスチヤンが殺されたといつた。これらの人たちもアメリカの宣伝にまよわされたのである。たとえば、オンヤン・リ(温陽里)教会の会衆は、そのとき舟にのつて南浦を立ちさろうとしていた千五百人の人びとのなかにまじつていた。ところが、アメリカ軍は、海上からかれらにむかつて砲火をひらき、空から

は機銃で攻撃をくわえた。これは何かのまちがいだと考えたプロテスタントたちは、讃美歌をうたいはじめた――しかし、アメリカ軍は発砲をつづけて、二百七十五人を殺した。

農民組会の組合員キム・クオンタイ（金権泰――四十八才）は、組合員だというのでつかまつた。アメリカ兵はかれの足と手をぶんなぐり、この拷問のために指はまがり、二度とふつうに歩くことはできなくなつた。かれの妻と娘もアメリカ軍にぶたれた。かれの妻はぶたれて鼻がかけた。

江西の町では、大きな中学校をはじめ大部分の建物がこわされた。信川地方の田舎では、十月二十日から十二月七日までの占領中に、アメリカ軍は千五百六十一人の人を虐殺した。このうち千三百八十四人は射殺（男九百三十二人、女四百五十二人、そのうち四百五十四人は八才以下の幼児）、五十七人は絞殺（男四十二、女十五）、五十人は生埋め（男二十五、女十）、三十五人は棒でなぐりごろし（男二十五、女十）、三十人は焼き殺し（男三十二、女三）などであつた。この報告は、およそ四十人ばかりの男や女の生存者の面前で、人民委員長リ・ヤンスク（李良叔）がわたしたちにしてくれたものであつた。その日じゆうわたしたちのきいた、たくさんの証人の説明を基礎にして、わたしたちは、アメリカ軍はつぎのような「犯罪?」のかどで人民をつかまえたのだということができる。愛国者であること、軍隊に親戚があつたこと、農民組合その他消費組合のような民主団体に参加していたこと、

また以上のべたような人を親戚にもつていたこと（消費組合の売店に働いていた一人の男は、両脛にたくさんの傷あとのあるのをわたしたちに見せたが、これはアメリカ兵が赤熱の棒で火傷させたものであつた）。

アメリカ兵は、この千五百六十一人の犠牲者のうち、拷問で死なかつたものを山につれていつて、あるものは射殺し、残りのものは生埋めにした。その共同墓地は、アメリカ軍の退却すぐあとで見つかつたが、それは、この殺人をやるまえに、アメリカ軍に墓穴をほらされた土地の農民がしらせてくれたのである。

共同墓地はつぎの場所で見つかつた。タイチヤンモ（泰昌墓）、ムヨン・リ（武永里）、ワサンボン（花像峰）、チヤンタイクアン（張泰館）、チヨンソン・ミエン（朝善面）、リカ・ミエン（利加面）、トンクル・ミエン（東君面）。タイチヤン・モの山の上から、わたしたちは、まわりの山々や岡の上に、たくさんの共同墓地があるのを見ることができた。

人民委員長や大勢あつまつた犠牲者の母親、妻、父親、子供らにつれられて、わたしたちはこの山の共同墓地のそばにいつた。いくつかの死体は近親が見わけて、谷の向い側の山にうつし、塚のなかに葬つた。わたしたちは、その塚もみた。一九五〇年十二月、共同墓地をほりえかしたときには、どの

人はどういう方法で虐殺されたか、ということをたしかめることができた。わたしたちのいる前で、だれだかわからないいくつかの死体から、おおいをとつてみせてくれた。わたしたちは、死体の手が背中でしばられ、いくつかの頭蓋骨は打ちくだかれているのをみた。また、わたしたちは、アメリカ軍の薬莢、血まみれのボロ、髪の毛、縄、靴その他着物のきれはしなどを見つけた。ちぢれの見えない黒髪と死体にまとう独特の着物をみて、この犠牲者たちが朝鮮の農民であることは、わたしたちにすぐわかつた。

この山だけでも、八つの共同墓地があり、その一つは長さ八十メートル、もう一つは七十メートル、深さは死体を二段に積みかさねるのに十分であつた。その他の穴はもつと深く（ほぼ五メートル）、もつと短かつた。

少しはなれたところに、小さな塚があつたが、これは朝鮮人が、墓地の中で母親といつしよにみつかつた二十人の子供の死体をうめたものであつた。

わたしたちをこの山につれてきた婦人の一人、タン・ブクトン（卓伏同――四十四才）は、かの女の兄弟の死体が頭を膝のあいだにつつこんで、手は背中でしばられたまま墓のなかに坐つているのを見つけたと話した。墓がほりかえされたときに自分に見えた光景は、あまりにもおそろしかつたので、

まったく見ることさえもできませんでした――目をひらいた死体、背中に赤ん坊をくくりつけたまま殺された母親など……と、かの女はつけたした。

いく人かの証人が話をしたが、その中の一人のキム・キスン（金基順――五十八才）は、かれの息子と嫁、そしてこの夫婦の子供たちが、かれのかくれているあいだに生き埋めにされたと話した。かれはその生き埋めの場所をさがしだし、手を背中でしばられている死体を自分でほりだした。

わたしたちは、この拷問と虐殺をやったのは、アメリカ軍だけか、それとも李承晩軍がまじっていたのかと、まわりの人たちにたずねてみた。答えは「この辺にいたのはアメリカ軍だけで、アメリカ軍がやったのです」というのであった。

その日一日中、わたしたちは何べんも空襲警報にひっかかった。というのは、ここは海岸ちかくで、アメリカ機がたえず漁民の出漁をさまたげ、朝鮮人の食糧調達のじゃまをしていた場所であったからだ。夜だけは、いくらかの漁船が出漁することができた。

この辺をアメリカ軍が占領しているとき、アメリカ軍は一万五千八百六十袋の穀物に火をかけてやき、退却するときには二万三千四百五十三袋を持ち逃げした。

アメリカ軍は豚や鶏、家鴨などのすべての家畜、それに馬もいくらかまじえて、殺して食ってしま

つた。

穀物の収穫期も近づいた一九五〇年の秋、アメリカ軍は四千三百ヘクタール（一ヘクタールは約一丁二十五歩）の稲田と二千百ヘクタールのその他の穀物畑を焼夷弾でやきはらつた。

備考。南浦では、街や家があとかたもなくなつてしまつたので、わたしたちに話をしてくれた人たちは、自分の住所をおしえることができず、ただ名前だけを知らせてくれた。

上記には、一九五一年五月二十七日、平安南道をおとづれた調査団のメンバーの全員が署名した。

第五章

一九五一年五月二十二日から二十四日まで、代表者の一団

リウ・チンヤン（中国）

ジエルメン・アンネヴアル（ベルギー）

エリザベエタ・ガロ（イタリア）
ミルセ・スヴアトソヴア（チエツコスロヴアキア）

は、江原道文川郡のマズエン（万先）村（平壌から一五〇キロ、元山から四八キロ）と、おなじく江原道の元山港を視察した。

代表団は、平壌、江東、山東の諸郡を通過したが、これらはほとんどみんな焼けうせていた。また代表団は有名な温泉地陽徳を通過した。陽徳はいまではガラクタと廃墟のかたまりにすぎなくなつていて、その中には中学校の残骸もまじつていた。わたしたちは、夜農民が畑をたがやしているのをみた。というのは、ひる間たがやすと、アメリカ機が機銃攻撃をくわえるからである。畑はていねいにたがやされていた。

マズエン・リ（万先里）では、農民たちは、夜しか仕事ができないのに、春の百姓仕事がふつうよりも早目におわつたと、わたしたちに話した。

マズエン・リのまわりで、代表団は、山や森や田畑や村落におちてきたアメリカの焼夷弾で、ひろい山林地帯がやけてしまつているのを見た。

マズエン・リの住民がわたしたちに話したところによると、五月二十三日の夜、アメリカ機が村に

三つの爆弾をおとし、いく軒かの家をこわしたということである。

キム・ソンイル（金松律）という農民は、つぎのような話をした。アメリカ軍は、一九五〇年十月十四日から十二月五日まで、マズエン・リを占領していた。かれらは人民軍と五日間戦つたのち、村に侵入してきた。占領期間中、かれらは人民軍に包囲されていたので、自分たちの陣営を有利にするため、ふきんの村々をやきはらい、逃げなかつた住民をつかまえ、マズエン・リにこしらえた仮監にぶちこんだ。数日してから、かれらはいく人かの婦人を釈放したが、かの女たちは山に逃げこむか、自分の家の廃墟のなかにかくれてしまつた。みんなでおよそ五百人が投獄され、五十四人が殺され、七十六人が元山におくられ、いまだに行方がわからない。投獄された婦人はみんななぐられ、そのうち二十人は暴行をうけた。

キム・ソンイルは、アメリカ軍といつしよにやつてきた南朝鮮人はただ通訳だけで、李承晩兵は一人もいなかつたと主張した。

マズエン・リから四キロのクミ（久美）村では、村人が避難していた防空壕に、アメリカ兵が手榴弾をなげこんで、老人、婦人、子供九人をころした。

アメリカ軍をおつぱらつたのち、村人は犠牲者を掘りだし、それらがどんな方法で殺されたかをし

らべた。

(一) 口に薬莢をつつこんで爆発させた。

(二) 斧で頭を割つた。

(三) 生埋めにした。

この死体発掘の目撃者のなかには、キム・ソンイル、セン・ウーン(孫雲)、前人民委員会議長ツエン・センカル(全仙傑)、ヤン・キワン(梁載煥)、その他の人がいた。アメリカ軍は退却するとすぐ、この村を焼夷弾でやきはらつた。一九五〇年十二月十五日と二十日に、いちばんひどい爆撃をくわえた。この爆撃中に農民チエン・キソン(千基松)の家族(十人、このうち七人は子供)はみなごろしにされ、子供四人をまじえた十人の村民は飛行機から機銃攻撃をうけた。

キム・プーチエン(金富伝――四十三才)は四人の子供の母親であるが、アメリカ軍は、「共産主義者」だ、といつて村民を迫害したと、調査団のメンバーに話した。コ・リ(高里)村の人民委員会の副委員長であつたかの女の夫を、アメリカ軍はつかまえた。かれらは、木の棒と銃の台尻でひどくなぐり、半殺しにして元山につれていつたが、そこで、かれはぶたれた傷がもとで死んでしまつた。村の人民委員会委員長は生埋めにされ、かれの年とつた父親は射殺された。キム・プーチエンはい

つた。「コ・リの婦人団体の会長チエン・マンスク（全満淑――三十一才）は「赤」だというので、アメリカ軍につかまり、二日間つづけさまに暴行をうけた。」

二人の子供の母親で二十七才のチヤ・オクスン（卓玉順）は、かの女の夫はコ・リの郵便局ではたらき、かの女自身はちつぽけな田畑をたがやしていたが、アメリカ軍は、「赤い」家族だといつて、かれら夫婦と子供（下の子供はやつと一才であつた）もいつしよに、監獄にぶちこみぶんなぐつたと話した。かの女はその後二度と夫にあつていない。数日間、監獄にいるうちかの女はたつた二杯の飯をうけとつただけである。それで、赤ん坊に乳をやることができなくなつた。元山の監獄にいるときには、アメリカ兵が毎晩いく人かの少女をえらんで、暴行をくわえた。元山の監獄に二十日いたのち、かの女は人民軍の手で釈放された。

コ・リの農民婦人であるカン・ユアンアン（姜栄安――二十八才）は、生後十八カ月の赤ん坊の母親であるが、アメリカ軍がやつてくるまえに、山に逃げこんだと話した。収獲物の手入れをしようとして、帰つてきた日に、かの女は赤ん坊といつしよに投獄された。子供がひもじさに泣くのを止めさせないというので、かの女はぶたれた。四日間ひとりぽつちの監禁をうけたあとで、赤ん坊といつしよに元山につれてゆかれ、そこで人民軍の手で釈放された。

元山は日本海の港で、北江原道の首都である。北江原道の労働党委員長チェ・クアンヨル（崔光烈）は、われわれにつぎのような説明をしてくれた。

「戦前、元山には十二万三千百二十七人の住民がいた。このうち、今のこつているのは、わずか五万七千六百六十七人である。そして、元あつた二万七千三百四十五の家や公共建物のうち、のこつているのは、わずかに九千二百五十七であるが、その中には多少ともこわれた家もふくまれている。」

「アメリカ軍の占領は、一九五〇年十月十四日から十二月九日までつづいた。その後一九五一年三月三十一日まで、元山は爆撃機（B—二九）二百七十五機と戦斗機九百十七機の攻撃をうけ、高性能爆弾八百三十八箇をおとされ、家や住民は三千五百十九回機銃掃射をうけた。また、この間、軍艦は四百八十七回、市を砲撃した。犠牲者は負傷五百十八人、死亡四百九十八人、そのうち男二百五十五人、女二百四十三人、そしてそれには二百四十一人の子供がまじつていた。

わたしたちが元山に滞在している間中、軍艦はたえず市とその周囲に砲撃をくわえていた。艦砲射撃は、五月二十三日から四日にかけての夜ことにはげしかつた。役所の報告によると、その夜、打ちこまれた砲弾は六千七百五十二発、六十五の公共建物と四十九の民家——これらはもうこれまでに被害をうけていた——が、かんぜんに焼失または破壊された。十一人の死者があり、重傷者は四人、三

人が軽傷をうけた。わたしたちは市内の砲撃をうけた地区を視察したが、そこは精油所にちかいところで、精油所はかんぜんにこわれていた。そこで、わたしたちは、いくつかの高性能爆弾と焼夷弾をしらべた。

どの家もどの家も、ガラクタのかたまりになつていて、その上をおおつている焼藁はまだ煙をだしていた。わたしたちのつくすぐ前に、母親と二人の子供の死体がほりだされた。この婦人の死体を葬るため藁むしろにつつむのを、わたしたちは見た。

防空壕に逃げこんでいた住民の大部分は、ガラクタの取り片づけに忙しかつた。

わたしたちがそこにいるうち、三回も空襲警報がでて、わたしたちは山腹の防空壕に待避せねばならなかつた。この防空壕は、これらの不幸な人たちに残された唯一の住居であつた。こうして、ほんとの穴居人町があらわれたのである。

わたしたちは、そういう「町」の一つであるチュンチョン・リ（春川里）をおとずれた。この町はぜんぶ洞穴であり、それは谷間の傾斜にほつてあつた。入口は木の枝の網でカムフラージュしてあつた。住民は、アメリカの飛行士がみつけて、機銃掃射をくわえるのをおそれているのである。

江原道民主婦人連盟の委員長クオン・チンル（権真禧）は、つぎのような公式報告をわたしたちに

読んできかせた。

「江原道の砲爆撃は、一九五〇年の六月はじめからはじまつた。たくさんのほかの建物がこわされたほか、つぎのような破壊をうけた。

(一) 一九五〇年七月十三日、労働者の休息の家——ここでは百六十八人の労働者が死んだ。第十三小学校、中央病院、赤十字病院——ここでは看護婦長が死んだ。また第一病院——ここでは患者三人と看護婦二人が死んだ。

(二) 一九五〇年八月十三日、師範大学と鉄道工場(B—二九型八機が爆撃)—百人以上の労働者が死んだ。

(三) 一九五〇年八月十五日、精油所(この後も数回爆撃された)と造船所。

(四) 一九五〇年九月十三日、第三女学校と道立中央劇場が命中弾をうけた。

(五) 一九五一年一月二十五日、市立図書館。現在、元山にはただ一つの学校も病院ものこつていない。授業は小さな組にわけてやつており、教師は市内の各地にある組から組をかけまわつている。この市は三十八度線にいちばん近い地方にあるので、住家は一軒もなくなつている。一九五〇年六月二十五日から一九五一年三月三十一日までに、二千二百九十八人の婦人と二千二百九十二人の子供が、江原

道だけで殺された。六百七十六人の子供は両親をなくした。」

十月九日から十二月十一日まで、アメリカ軍がこの道を占領しているあいだにやつた残虐行為について、クォン・チンヒ（権真禧）はつぎのような公式報告をしてくれた。

「鉄原では、千五百の市民が殺されたが、そのうち百三十人は逃げこんだ防空壕で生埋めにされた。」

「カルマ（葛麻）の町（鉄原郡葛間面）では、農民のオム・ソンホ（厳声浩）とその家族は、六人の子供をまじえてアメリカ軍に銃剣でつき殺された。」

「オクトン・リ（玉调里）（平康郡）の村では、農民セ・ドンチョ（呂東朝）の嫁（二十三才）は八カ月の身重であつたが、アメリカ軍につれてゆかれた。かの女は着物をぬがされ、公衆の面前でさらされ、木にくくりつけられた。かの女は腹を切りさかれて、赤ん坊をとりだされた。」

「ミーイエン・リ（美延里）（安辺郡安東面）では、農民セ・ヤンソン（呂良先）の家族の三人の婦人が防空壕につれてゆかれたが、アメリカ兵が暴行をしようとしたとき身をまもつたので、乳房を切り取られ、膣に赤熱の鉄をつつこんで殺された。」

「元山のコンソン（論松）街にすむ四十二才の婦人チエ・オクリ（趙玉裡）は、十四人のアメリカ兵

につづけざまに暴行された。かの女はまだ生きているが、床をはなれることができないほど弱つている。今はトンチャン（東朝）村にすんでいる。」

「ロコク（路谷）の村（鉄原郡梨洞面）では、三十二才の婦人キム・ヒョースン（金孝順）とその子供たちが、十一月三日アメリカ軍につかまつた。かの女は着物をぬがされ腹に銃剣をつきさされ、その後で射殺された。子供たちはかの女の側で餓死した。」

「十三万の住民のいた江原道だけでも、二千九百三人の婦人がアメリカ軍や李承晩軍に暴行をうけた。」

調査団のメンバーは、このほかの証人とも話した。

プロテスタントの宣教師で、四十九才の寡婦のチエン・キエンファ（全権花）は、かの女の嫁のユン・スンセ（尹順子）が夜中にたたきおこされ、二人の娼婦といつしよに自動車につれこまれたことを話した。かの女は稲田のなかに逃げだしたが、追つかけられ、暴行され、射殺された。チエンの兄弟チエン・チュンクアン（全忠寛）とその妻パク・キエンリエル（朴景烈）は街をあるいているとき飛行機の機銃火でころされた。前者は十二月二十九日に、後者は十二月二十四日に。チエン・キエンファは、この夫婦の子供六人をそだてている。

元山のキエンサン・リ（景山里）街にすむ農民婦人で四十六才のシン・イエンオク（申英玉）は、かの女の嫁は二十五才で、九カ月の身重だつたが、（過去二年のあいだこの地の婦人団体の議長をつとめていた）、一九五〇年十一月十八日につかまつたと話した。「赤」だというので、ぶんなぐられ、五日後、町の四つ辻で公衆のさらしものにされた。生れるばかりになつていたかの女の赤ん坊は、棒を子宮につきさして殺された。母親はその場で死んだ。これをやつたのは、二人のアメリカ兵と一人の李承晩兵であつた。

この死刑執行に強制的に立ちあわされた目撃者としては、リン・パクマン（林白晩）とキム・オンヨ（金恩女）がいる。

この婦人の夫パク・チャンイン（朴燦089二十六才）つまり、シン・イエンオク（申英玉）の息子は、つかまつてぶんなぐられ、射撃されて、死んだものとして森の中におきすてられた。家族がそれを見つけて家につれてかえつたが、傷がもとで今死にかけている。

元山の住民で五十五才のキム・センヒ（金聖姫）は、一九五〇年十一月二十一日、五人のアメリカ兵がクリスチャンの男やもめシン・ボンキン（申奉均）の家におしいり、かれの留守中いちばん上の姉娘シン・フアスン（申花順）を二人の妹の面前で暴行したと、調査団のメンバーに話した。二人の

小さな妹が泣きながら逃げだすと、隣の家の前でそれを射殺した。いちばん上の姉娘は三日後に死んだ。

セドン・リ（世洞里）（元山市内）にすみ、婦人団体の会員で、三十八才の農民婦人リ・クムスン（李錦順）は、自分は一九五〇年十二月二十五日生後一カ月の赤ん坊といつしよにつかまつたと、わたしたちに話した。かの女は元山の町のカルマ・リ（葛麻里）の郊外につれてゆかれた。かの女は毎晩訊問されるごとに背中と腹をぶたれた。十一月二十日釈放されたが、その五日後かの女の子供は死んだ。十一月二十日、かの女の夫がつかまり、七日間拷問されたのち、どこかえつれてゆかれた。解放後、リ・クムスンは安辺郡世源面のチョンチエン・リ（春田里）にちかい谷間で夫の死体を見つけた。そこの川の土堤には、三十九人の死体がころがつていたが、手はみんな背中でしばられ、めいめいの左の目には弾丸を打ちこまれて穴があいていた。

この章には、一九五一年九月二十六日、北江原道をおとづれた調査団のメンバーの全員が署名した。

第六章

調査団のつぎのメンバーからなる一団は、朝鮮の北部を視察した。
ヒルデ・カーン（ドイツ民主共和国）
リリー・ヴエヒター（西ドイツ）
バイ・ラン（中国）
トレース・ソエニト・ヘイリゲルス（オランダ）
旅行は平壌から介川、それから煕川、江界、満浦にゆき、平壌にひきかえした。
平壌から介川にゆく途中、調査団のメンバーは四つの小さな町――それはほとんどかんぜんにこわされていた――と、その他たくさんの焼けうせた村や農民の住宅を見た。
メンバーは、旅行の全道程で、こわれていない町は一つも見なかつたし、被害をうけていない村をすくなかつた。
調査団のメンバーは六つの山火事をみたが、そのうち二つは自分らの面前で火がついた。

――一つは平壌と介川のあいだで、もう一つは熙川と介川のあいだで。両方の場合とも飛行機の音がきこえ、調査団のメンバーは、地面から火柱のたつのをみたが、そのすぐ後でもえさかる火が見え、それは突然急速にひろがりはじめた。メンバーは、火が木の枝にもえうつるのを見た。この旅行の途中、調査団のメンバーは、山火事で黒くなつた山腹をたくさん見かけた。

介川面は、介川の町と四つの村から成つている。その位置は平安南道の北部にある。道人民委員会の委員長キム・ベンホ（金炳午）は調査団のメンバーにつぎのような報告をしてくれた。一九五〇年の十月二十五日、介川はアメリカ軍第二十七装甲師団に占領されたが、この師団は他の参加国の軍隊で補強をうけていた。

キム・ベンホは、とくにイギリス、オーストラリア、カナダ、トルコの各軍と数百の李承晩軍のいたことを注意したが、全軍八―九万にたつしていた。占領は四日間つづいたが、介川で被害をうけぬところは一つもなかつた。

介川面には一万三千軒の家があつた。そのうち、六千五百以上が、こわされていたが、その大部分は爆弾でやられたものであり、のこりは退却のときにアメリカ軍が火をかけたものである。残つた家も被害をうけていた。

一九五〇年の六月前には、七千六百頭の牛がいたが、アメリカ軍が退却したあとに残つたのは、わづか二千二百頭であつた。七千八百頭いた豚は、三百頭しか残らなかつた。鶏は十万羽いたのが、たつた千羽しか残らなかつた。

キム・ベンホは、そんなにたくさんの牛が持ちにげされたし、男の多くは人民軍に参加しているのに、婦人たちはふつうよりも、二週間ほど早く作物の蒔きつけをおわつたと話した。

介川は、こわされる前には、高等学校一つ、中学校六つ、小学校三十一、図書館一つ、劇場一つ、病院と診療所十三をもつていた。これらの施設はみんなこわされた。今でもたえ間なく爆撃をうけているので、再建はとてもやれない。

この方面には、八万以上の住民がいて、その八割は農民であつた。いま住民の数はおよそ六万で、みんな農村に疎開している。アメリカ人は射殺、焼き殺し、なぐり殺しで、千三百四十二人をころした。わかつているだけでも、八百六十人の婦人が暴行されたが、しかし多くの婦人は恥づかしいので事実をつげていない。調査団のメンバーは、それらの犯罪はアメリカ軍がやつたものと信じているのかと、キム・ベンホにたずねてみた。かれは、そうです、ほかでもないアメリカ軍がやつたことにまちがいないと答えた。

一つの例として、かれは、つぎのような話をした。占領中、かれ自身パルチザンの一指導者であつた。かれの部下の一人に、有名な組織者のキム・ケスン（金桂順——三十一才）がいた。かれは自分の家族をみんななくした。かれの妻リー・ウアクシル（李和実）は子供をつれいたが、アメリカ軍につかまつて、夫のことをきかれた。かの女は情報をやらなかつたので、拷問にかけられた。アメリカ軍はかの女の左腕を切りとり、ついでかの女の左脚を切りとつて、さいごには、子宮を切りひらいて胎児をとりだした。かの女が死んだのち、この家族の四人の子供は家のなかにとじこめられて、焼き殺された。キム・ケスンは、かえつてきたとき、その死体をみ、近所の人からその話をきいた。

介川の町のマジヤン・リ（馬場里）街二番地にすんでいるリー・ジンヒエン（李真賢）という婦人は、調査団のメンバーに次のような報告をしてくれた。かの女の妹は農民としてすぐれた働きをしたので、政府から勲章をもらつていて、この辺の婦人民主運動の役員であつた。アメリカ軍がやつてくるまえに、リーはいつしよに逃げようと妹にすすめたが、妹は役員だというので逃げないので、リーは両人の子供をつれて、ひとりで逃げだした。リーは妹がこないので、いつたいどうしているのかと、八つになる自分の息子をつれて見にいつた。かの女ははだかにされて、木にくくりつけられ、アメリカ人になぐられながら、かの女の夫やかの女の団体のことをきかれていた。かの女が答えなかつたので、

電気の拷問にかけられた。八つになる息子は腹をたてて、兵隊どもにとびかかつていつて、射殺された。この若い婦人は数日間拷問をうけ、アメリカ兵はそれを住民たちにみせた。さいごに、かれらはかの女を射殺した。

リー・ジンヒエンもつかまつたが、かの女は妹との関係をかくして、やつと生命をたすかつた。リーは、妹の話はたつた一つの例であつて、まだほかにもたくさんの残虐行為を知つていると、調査団のメンバーに話した。かの女は、アメリカ軍が婦人や少女狩りをやつて、ジープで娼家につれこむのをみとめた。リーやその他の若い婦人は顔に灰をぬり、老人のような着物をきて、それをのがれた。

ほとんど完全にこわれた介川の町で、調査団のメンバーは、なかんずく、爆撃された病院の一つをみた。その屋根にはまだ赤十字のしるしがのこつていた。町の婦人団体の会長は、ある一つの小さな住宅区域で五百人の人が殺され、住宅はかんぜんに焼きはらわれたといつた。

婦人と子供の群衆が調査団のメンバーをとりまいて、自分たちの話をきけとせがんだ。これらの婦人の大部分はひどく興奮していて、泣きながらわたしたちの手や着物をにぎりしめた。時間がなかつたので、これらの人たちの話をぜんぶ聞くことはできなかつた。調査団のメンバーは、つぎのような名前と事実とを書きとめた。

チヤ・ユスク（車有淑）という老婦人は、アメリカ人がきたとき、人民軍に参加して斗い傷をおつていた息子が軍服をきて家にいたが、かの女の目の前で射殺されたと話した。

キム・イスク（金伊淑）という若い婦人は、農民組合の指導者であつたかの女の夫が殺されたと話した。かの女は赤ん坊をせおつて逃げた。アメリカ兵はかの女をつかまえ、赤ん坊を地面にたたきつけて、ふみ殺した。

オ・インブン（呉仁粉）は、二十八才のかの女の娘のキム・ユンジュ（金融珠）が数人のアメリカ兵に暴行され、溺死させられたと話した。

リー・スンシル（李順実）という若い婦人は、はだかで十二日間、多くの兵隊といつしよに一つの室におかれた。

介川のブクブ・ミエン（北富面）にすむ二十才のキルリョンニ（吉英礼）は、かの女の兄弟や義姉妹がアメリカ軍に殺されたといつた。

介川のヒエンリョン・リ（玄英里）にすむ三十七才のホン・ユンボク（洪連福）は、かの女の夫が射殺されたといつた。

介川のリヤンヘン・リ（良玄里）にすむ三十四才のキム・リョンシル（金英実）は、かの女の息子

が殺されたといつた。

介川のチュンフン・リ（重黄里）五七番地にすむ三十才のリ・ムウンジュ（林雲珠）は、かの女の兄弟がアメリカ兵に殺されたといつた。

介川面のセンポ・リ（善浦里）にすむ三十四才のチョイ・センチョ（超先朝）は、アメリカ兵がかの女の夫を射殺したといつた。

わづかな家をのぞいては、ほとんど何もなくなつているこの町の訪問をおわつて、調査団のメンバーは、農村にある孤児院にいつた。そこでは、いま四十八人の子供がそだてられている。これらの子供は爆撃された町から救いだされたのである。六つくらいの小さな男の子は、爆弾の衝撃でつんぼとおしになつていた。かれの名前も親戚の名前もまだわかつていない。介川では、調査団のメンバーは、介川の北方の或る村の民主婦人連盟の会長であるリー・センシル（李生実）に会つた。かの女はいろいろ話したが、数週間まえかの女の村で、アメリカ機一機が急降下して、野良ではたらいていた三人の男に機銃火をひらいた。二人の男と三匹の牡牛が殺され、三番目の男は重傷をうけたといつた。

江界は慈江道にある。道人民委員会の委員長リー・チョウセン（李珠善）氏は、わたしたちに次のようた報告をしてくれた。「この朝鮮のいちばん北の道は、人口がすくなくおもに農民が多い。道内には

いくらかでも重要な工業は一つもない。敵軍は道内のほんの一部を占領しただけである。この道の人民政府は、あらゆる手段をつくして難民の救助につとめたが、すべての人に食糧と家をあてがうことは、たいへん大きな問題である。アメリカ機が北に逃げる人民に機銃攻撃をくわえ、道やたんぼの家畜を殺すので、困難はますます大きくなつている。」

江界の町には四万の住民がいた。教員を訓練する二つの大学、林業大学一つ、高等学校一つ、中学校二つ、小学校四つ、劇場一つがあつた。これら文化施設ぜんぶのうち、男子中学校ただ一つだけがまだ立つているが、それも被害をうけている。保健センターは、屋根に赤十字のしるしをつけていたのに、それでもこわされた。

町には二つのプロテスタント教会と一つのローマ・カトリック教会、儒教の廟一つと天道教の教会一つがあつたが、みんなこわされた。住民のなかのキリスト教徒たちは、はじめ教会のなかや近所に避難をしていた。かれらは、アメリカ人が教会建物は見のがすだろうと考えていたのである。

江界の町だけではなく、山の中のほんの小さな百姓屋まで、アメリカ機の爆撃をうけて焼けてしまつた。

江原の町は一九五〇年十二月十二日はげしい爆撃をうけて、ほとんど完全にこわされてしまつた。

アメリカ機はおもに焼夷弾をおとし、あとで時限爆弾をおとした。時限爆弾は、おとされてから二十日までのあいだ、さまざまな時間に爆発した。

一九五一年二月のはじめ、もはやこわれたこの市に、はげしい爆撃があらたにくわえられた。こんどはおもに時限爆弾をつかつたので、住民はその後の二十日間町によりつかなかつた。

調査団のメンバーは、この地域で只一つ軍事目標になりうるものは、鉄道と停車場であるが、これらのものは、もはや一九五〇年十月九日の爆撃でこわされていたという報告をきいた。

調査団のメンバーは、ほとんど完全にこわれたこの市をおとずれて、外科医のバイク・キジエ（白基載）博士と話した。バイク博士は、一九五〇年十二月十二日に市立病院が爆撃されるまえ、低空をとぶアメリカ機が、病院の屋根の赤十字に機銃攻撃をくわえたといつた。

一九五〇年十二月十二日の爆撃後、バイク博士自身百人以上の負傷者を手当した。一九五一年二月の爆撃後、かれだけでも二百人以上の人間が死んだのをみた。バイク博士はアメリカ機が農民の住宅を爆撃するのを見たとも話した。かれは、たとえば、農民パク・フーリョン（朴厚連）の家がどんなふうに爆撃されたかを、またこの家では十人が殺されたことを話した。

調査団のメンバーは、政府がどうして伝染病をさけたかについて、バイク博士にたずねた。答え

は、大規模な予防注射によつてであるが、そのための薬品は世界の各地の朝鮮の友人から送つてきたものだというのであつた。

委員会のメンバーは江界で三人の農民婦人にあつたが、この人たちは、わたしたちが町にきているときいて、わたしたちに礼をいいにきたのである。そのうちの一人はいつた。「わたしは四人の子供のうち二人を爆撃でなくしました。わたしは、うんとはたらいてかれらに復讐してやるのです。というのは、わが人民軍が何でも必要なものをみんな受けとれれば、アメリカ軍を追いだすことができますし、そうすれば平和がふたたびやつてくるからです。」

満浦は朝鮮と中国との国境にある。人民委員会の委員長リー（李）は調査団のメンバーにつぎのように話してくれた。この町には一万二千七百人の住民がいる。工業としては、木材、繊維の軽工業がいくらかあるだけである。満浦ははげしい爆撃を二回うけた。一九五〇年十一月十二日には、ほとんど完全にこわされてしまつた。調査団のメンバーは、その廃墟をおとずれて、異常にたくさんな焼夷弾のかけらがあたりにおちているのをみとめた。一九五〇年十二月七日、もはやこわれてしまつていた町はもう一遍爆撃をうけ、地下壕や廃墟のあいだにすんでいた人が三百五十人以上もころされた。調査団のメンバーは、一つの爆弾穴をみたが、それは深さが少くとも七メートルはあつた。満浦には、

またたくさんの文化施設があつた。なかんずく調査団のメンバーは、大きな学校建物と劇場の残骸をみとめた。

ほかのこわされた都市とおなじに、ここではたくさんの住民が地下の穴に住んでいる。調査団のメンバーは、そういう住宅の一つをみた。それは元の地下室の一部であり、中はまつくらで、二人の小さな子供がいて、小さい方は二才であつた。この二人は十三才の兄が世話していた。調査団のメンバーは、この兄や近所の人から父親は鉄道の労働者で母親は一九五〇年十二月七日の爆撃で死んだということをきいた。リー氏は、人民政府はまずまつさきに、だれも世話のしてがない子供の面倒を見ているのだと話してくれた。

この章には、介川、熙川、江界、満浦をおとずれた調査団のメンバーの全員が、一九五一年五月二十七日署名した。

結論

調査団のメンバーが、朝鮮の各地でいろいろの調査をしたのち、調査団は、つぎのような結論にたどりついた。

朝鮮の人民は、アメリカ占領軍から、無慈悲で系統的な絶滅作戦をうけているが、これは人道の原則に反するばかりか、たとえばハーグやジュネーヴできめた戦争法規にも反するものである。それはつぎのような方法でやられている。

（a）食糧、食糧貯蔵と食糧工場の系統的な破壊によつて。森林や熟れた作物は焼夷弾で系統的にやかれ、果樹は切りたおされ、野良で家畜をつかつて働いている農民は低空をとぶ飛行機から機銃掃射を浴びて殺されている。こういう方法で、朝鮮の人民ぜんたいが飢餓の運命にさらされている。

（b）町から町を村から村を、つぎつぎに系統的にこわすことによつて。これらの町や村の大多数は、どんなに想像をたくましくしても、軍事目標とは考えられないし、工業中心地とさえも考えられない。この系統的な破壊の目的は、まず第一に朝鮮人の斗志を打ちくだくこと、第二にかれらを肉体

的に消耗させることであるのは明らかである。この止むことのない空襲で、住宅、病院、学校などが計画的にこわされている。灰のかたまりになつてしまつた町。生きのこつた住民が防空壕のなかにすむほかない町にさえ、なお爆撃はつづいている。

（c）国際法で禁止されている兵器を系統的につかうことによつて。つまり焼夷弾、石油爆弾、ナパーム爆弾、時限爆弾、それに低空をとぶ飛行機から市民をたえず機銃掃射することによつて。

（b）朝鮮人を残虐にみなごろしすることによつて。アメリカ軍や李承晩軍が一時占領した地域では、占領期間中に、数十万の市民、老人から子供までまじえた家族のぜんぶが、拷問され、打ち殺され、焼かれ、生埋めにされた。そのほか数千数万人は、せりあうような監獄のなかで、飢えと寒さで死んでいつた。これらの人びとは、何の罪もなければ、取り調べも、裁判も判決のいいわたしもなく、監獄にぶちこまれたのである。

これらの大衆的拷問と大衆的虐殺は、ヒトラー・ナチスが、その一時占領したヨーロッパでやつたより以上のものである。

質問をうけたすべての市民のした証言は、これらの犯罪のほとんど全部が、アメリカ軍の兵隊や将校がやつたものであり、そうでない場合でもアメリカ軍将校の命令でやられたものであることを示し

ている。だから、これらの残虐行為の全責任は、朝鮮のアメリカ軍総司令官、つまりマッカーサー将軍、リッジウェイ将軍、そして自分のことを国連軍といつている侵略軍のその他の司令官が負うべきものである。これらの残虐行為は、前線の将校の命令によつてなされたものであるが、その責任は、自分の軍隊を朝鮮におくり、その国連代表が朝鮮戦争にさんせいの投票をした政府にもある。

調査団は、朝鮮にたいしてやつた犯罪の責任者は、一九四三年の連合国宣言にきめてある、戦争犯罪のかどで告訴されねばならぬし、おなじ宣言に定めてあるように、世界の人民によつて裁判されねばならぬと自分たちは確信をあきらかにする。

調査団は、朝鮮の戦争は、すこしの猶予もなくおわらせるべきであり、外国侵略軍は今すぐ朝鮮から引きあげるべきであるということを、自分のつかえるあらゆる手段をつかつて主張するように、普通人の名前で、世界のすべての人民に呼びかける。

調査団はまた、朝鮮にたいする即時の援助を組織すべきことを、世界のすべての人民に訴える。朝鮮の人民は、朝鮮の領土にいるアメリカ侵略軍のおかした残虐な犯罪の結果として、餓えと病気におびやかされているのである。

調査団は、世界の各国政府、わが婦人連盟に加入していようといまいと世界中のすべての婦人団体、

世界平和評議会、平和のためにたたかうすべての団体、そしてその政治的宗教的意見がどうあろうと平和の事業を尊重するあらゆる人道主義団体と公的な指導者に、この文書をおくることを、国際民主婦人連盟に要求する。

調査団は、朝鮮にいるアメリカ軍と李承晩軍のおかした残虐行為をしらべるための国婦際人調査団の、この報告を、国際連合に提出することを国際民主婦人連盟に緊急に要求する。

この報告書は、英語、フランス語、ロシア語、中国語、朝鮮語の五カ国語でつくつた。

調査団長　**ノラ・K・ロツド**（カナダ）

副団長　**リウ・チンヤン**（中国）、**イダ・バツハマン**（デンマーク）、

書記　**ミルセ・スウアトソヴア**（チエコスロヴアキア）、**トレース・ソエニト・ヘイリゲルス**（オランダ）。

調査団員　**モニカ・フエルトン**（イギリス）、**マリア・オヴシヤンニコワ**（ソ連）、**バイ・ラン**（中国）、**リ・ケン**（中国）、**ジレツト・ジーグレル**（フランス）、**エリザベタ・ガロ**（イタリ

ア）エヴア・プリースター（オーストリア）、ジエルメン・アハンネヴアル（ベルギー）、ヒルデ・カーン（ドイツ民主共和国）、リリー・ヴエヒター（西独）、リ・チケ（ヴエトナム）、カンデラリア・ロドリゲス（キューバ）、レオノル・アギアル・ヴアスケス（アルゼンチン）、フアトマ・ベン・スリマン（チュニジア）、アバシア・フオデイル（アルジエリア）。

あとがき

このまえの大戦で、日本の国民は、世界の戦史にはじめてあらわれた二つの犯罪的な戦争方法を、身をもつて経験した。一つは、広島、長崎におとされた原子爆弾であるが、もう一つは、日本軍自身が大陸でやつた細菌戦争であつた。

さすがに、いま日本の国民は、原子爆弾の非人道的な残虐さに、しんこくな呪咀の声をあげている。しかし、げんに中国や朝鮮で、日本軍のやり方を発展させたむざんな細菌戦争がやられていることには、十分な関心をはらつていないようだ。細菌戦争というものは、世界ではじめて日本人がやりはじめたものであるから、それにたいする呪咀と攻撃は、原子爆弾にたいしてと同じようにやらねばならぬのが、わが国民の国民的な義務であろうと思う。まして、朝鮮、中国でアメリカ軍のつかつている細菌兵器の供給源の一つは、日本国内にあるといわれているのである。(アメリカ本国では、メリーランド、ミシシツピイ、インデイアナの諸州とワシントンの郊外、またカナダのサツフイールドに細菌兵器工場や施設があり、日本では、埼玉県春日部町にある動物取扱所や研究所—所長は小沢市三

郎―が細菌戦用の動物の供給にあたつているといわれている。）

むかし、大本営発表というものがあつた。いまでは、大本営発表！ というと、きつとみんながどつと笑いだす。それほど、それはばかばかしいものであつた。細菌戦についてのアメリカ側の主張をきいていると、日本軍の大本営発表を思いださせるものがある。

むかし、ヒツトラーは、小さなうそではなく、大きなうそをつけといつた。小さなうそは、一人一人の直接の経験で、それがうそかほんとかたしかめられるので、すぐにばれてしまうが、それができないような大うそをついて、独占した報道機関でそれを宣伝すれば、大うそは容易にばれないというのである。大本営発表はその伝であつたし、細菌戦についてのアメリカ側の主張もたしかにそうである。

細菌戦の話をすると、どういう証拠がありますか、といわれる。いろいろな報道をあげて説明すると、それが事実かどうか信じられない、あなたはいつて見てきたわけではないでしようといわれる。アメリカ側の「大うそ」の宣伝は、そういう「真理に忠実な慎重な心理状態」を世界の一部につくりだしている。アメリカの報道機関に一辺倒している日本では、ことにそういう心理状態がつよい。

世界の一流科学者を動員しておこなわれた国際科学委員会の細菌戦調査は、世界の一部にあるそう

いう心理状態を打ち破るにたるめんみつで説得的な調査であつた。それは、ばかばかしいほど科学的に事実をよくしらべ、アメリカ軍が細菌戦争をやつていることを、すこしの疑いの余地もないほど、くわしくりつぱに証明した。こういう科学的な調査さえ信じられない人は、なにかためにする「曲学阿世」といわれても仕方があるまいし、アイゼンハワアーが大統領になつたことも、毛沢東や金日成などという人間が中国や朝鮮にいることも信じない方がよかろう。いつて見てきたわけではないでしようから。……しかし、そういう「慎重」な人たちにかぎつて、あんがいかんたんに大本営発表を信じこむ人たちではあるまいか？

さて、この科学委員会の報告書は、一九五二年九月十五日北京で発表されたときには、さすがに朝日新聞その他の日本の新聞も外電でそのことを報道した。本書は報告書の本文を英文と中国文を参照してほん訳したものである。報告書の本文のほかに、四十六件の付録のなかからも適当なものをいれるつもりであつたが、いろいろの都合で実現しなかつた。それで付録のなかでは、捕虜飛行士二人の手記と中国の衛生運動をとりあつかつた覚書の三つだけを入れた。ヒューレット・ジョンソン博士の論文は、この報告とはぜんぜん関係のないものであるが、細菌戦と新中国の一面を面白くえがいているので、本書の付録にした。

あの奇怪な朝鮮戦争については、いままで三つの国際調査団が組織された。いちばんはじめは、一九五一年春の国際民主婦人連盟の調査団であり、つぎは一九五二年春の国際民主法律家協会のそれで、さいごがこの国際科学委員会である。このうち第二の法律家協会の調査報告は、もう「白人は有色人種を迫害する」（三一書房）の付録として出版されているので、本書では、国際民主婦人連盟の調査団報告を、付録としてつけた。これらの報告を読めば、アメリカ軍の朝鮮戦争がどういう性格の戦争であるかがよくわかる。

蒼樹社から本報告書のほん訳を依頼されたとき、わたしはあまりにもかんたんに引きうけてしまった。ところが、ほん訳に手をつけてみると、自然科学の専門的知識のないわたしには、術語その他がひじように困難であつた。さいわい、民主的自然科学者の某氏に報告書の本文のぜんたいを、またこの某氏をつうじて某老大家に本文の一部を通読訂正していただけたので、ほつとした。なおまだまちがいがあれば、訳者の責任であり、こんご訂正したい。資料については、日本平和委員会事務局その他のお世話になつた。以上の方々や会にあつくお礼を申しあげる。

十一月　　　　訳　者

再版

静かなる山々

徳永直著

好評

☆ソ同盟で絶讃され
スターリン賞候補の問題作

ソヴエツト文学一月号評
この作品は日本の民主主義文学が量質共に今や高いレベルに達したことを証明してゐる……。この作品には三十年代　進歩的作品にありがちであつた形式主義的なところが全くない。

ソヴエツト文学新聞八月二十六日
小説『静かなる山々』は徳永直創作活動における新段階である。

B6 三四五頁
定二七〇円〒二〇

中島健藏
この作品は作者の多年の創作欲が生みだしたその頂点である。日本国民の解放と平和のために作者は戦後はじめて労働組合の集団斗争を、すべて国民の、とくに農民の問題と結びつけてとりあげた。その意味で日本国民に必ず読んで貰いたい小説である。

除村吉太郎
日本の批評が今日までこの作品に正当な評価をあたえていないのは大きな怠慢であつたと思う。この作品を本当に好きになれる読者は有望な読者である。日本民族の独立と、世界平和のための斗いに積局的に参加しうる読者である。すべての読者がこの作品が好きになることを切望する。

東京都千代田区神田猿樂町　蒼樹社　振替東京191719番

国際科学委員会
細菌戰黑書

譯者　片山さとし
發行者　奈切勝美
印刷者　齋藤六之助
発行所　株式会社　蒼樹社
東京都千代田区神田猿樂町2の11
振替東京　191719

訳者トノ申
合セニヨリ
検印廃止

昭和28年1月10日　印刷
昭和28年1月15日　発行

都內定価 240円　地方定価 250円